大学男子ハンドボール競技におけるサイドシュートに対するゴールキーピングの変容

−卓越した１名のゴールキーパーを対象に−

平尾 克己（201712015、ハンドボールコーチング論）

指導教員：會田 宏、藤本 元、山田 永子

キーワード：　ゴールキーピング動作、位置取り、セービング

【目的】

本研究者のサイドシュートに対するゴールキーピング動作とサイドシューターへの対応について、2018 年と 2019 年との間で比較し、セーブ率が向上した原因を明らかにする。

【方法】

本研究者が出場した公式戦におけるサイドシュート 2018 年 60 シーン、2019 年 74 シーンに対するゴールキーピングを分析した。

ゴールキーピングの全体像を明らかにするために、被シュート数、シュート阻止数、枠外シュート数、シュート阻止率、枠外シュート率、セーブ率の 6 つの項目を分析した。

ゴールキーピング動作を明らかにするために、歩数、移動の方向、セービング方向など 17 項目を分析した。

ゴールキーピング動作については、第一ポジショニング局面、第二ポジショニング局面、プレセービング局面、セービング局面の 4 局面に分類した。サイドシュート動作については、待ち時点、受け時点、踏み切り時点、フォワードスイング開始時点、リリース時点、通過もしくはミート時点の 6 時点を設定した。

2018 年と 2019 年のそれぞれで次のように比較検討した。

①ゴールキーピング動作における各分析項目内の分類項目間の比較

②サイドシュート動作が変化する時点とゴールキーピング局面との対応の比較

③セービング局面におけるセービング動作とシュートコースとの関係の比較

統計処理にはカイ 2 乗検定および残差分析を用い、有意水準はいずれも 5%とした。

【結果】

①2018 年と 2019 年で比較すると、全体のセーブ率は 40.0%から 59.5%へと 19.5%高くなった(表１)。

②ゴールキーピング動作については、位置取りに使う歩数が 2019 年の方が少なかった。

③サイドシューターが踏み切り時点のゴールキーピング局面は、2018 年では第二ポジショニング局面が多かったが、2019 年ではプレセービング局面が多かった。

④シューターのシュートコースとセービング方向の関係をみると、2019 年はシュートコースとセービング方向の一致率が高かった。

【考察】

これらのことから、2018 年と比べて 2019 年においてサイドシュートに対するセーブ率が向上した理由として以下の 4 点が考えられた。

①シューターの動きを予測し、最小限の動きで位置取りするようになった。

②シューターに対して正確に位置取りしようとするようになった。

③シューターに対する位置取りを早めに正確に完了させ、セービングの準備に時間をかけるようになった。

④間違った方向に動くことが減り、縦と横のセービング動作が正確になった。

表１　ゴールキーピングの全体像

		2018	2019
被シュート数	左サイド	40	30
	右サイド	20	44
	全体	60	74
シュート阻止数	左サイド	7	13
	右サイド	10	21
	全体	17	34
枠外シュート数	左サイド	5	5
	右サイド	2	5
	全体	7	10
シュート阻止率	左サイド	17.5%	43.3%
	右サイド	50.0%	47.7%
	全体	28.3%	45.9%
枠外シュート率	左サイド	12.5%	16.7%
	右サイド	10.0%	11.4%
	全体	11.7%	13.5%
セーブ率	左サイド	30.0%	60.0%
	右サイド	60.0%	59.1%
	全体	40.0%	59.5%